

一〇 綱宗朝臣護封の事 (二)

扱、相談一決の上、一門、家老ども連署して、綱宗病に犯されて國務に堪へず、藩翰の任を惣領龜千代に譲りて退隠したしとの志あり、臣等も亦ひとしく望み乞ふ處に候、仰ぎ願くは上裁を賜はりて仙臺の國家を泰山の安きに置き申したしとの旨意を柳營に披露した。そこで柳營でも其前に打合せがあつて、固より承知の事であつたから、其儘願の筋を聞届けられた。此時の書付の書式や宛名などは、其頃の作法に従つて色々の慣例に依つたものであるけれども、くだくしければ省く。(たとへば家元一門より綱宗隱居龜千代相續の願書を伊達の親類立花忠茂と兵部少輔に宛て出し、立花と兵部少輔より、老中宛の願を出すの類を云ふ。)そこで萬治三年七月十八日に綱宗閉門を言付られ、それから一寸暫く跡取の沙汰がなくて、八月廿五日になつて始めて龜千代に所領悉皆相續の命令が下り、綱宗は品川の下屋敷に隱居を申付られ、押込め同様の身分となつて、昔の榮華も夢となつてしまつた。其前に綱宗が閉門を申付かつた翌日、即ち七月十八日に兼て綱宗の寵臣で、始終殿の亂行を煽動した四人(其姓名は前に記す)のものは、何の取調べを受けるでもなくて、其日の中に殺されてしまつた。四人のうちには渡邊といふ恐ろしい腕のきく剛の者の居たことゆゑ、並一通りの手段ではいけないと云ふので、渡邊金兵衛など云ふ膽力のある腕利が行き、不意を狙つて騙し撃ちにした事もある。斯様に刑罰を速かにしたのは、一には彼是取糾して居るうちに、手間どつて、其の爲めに諺に云ふ毛を吹いて疵を求めると云ふ状態に陥り、人の思ひもよらぬ處から祕密の罪惡でも露はれて、面倒な事が持ち上るまいものでもない、それより速かに片付けてしまへば死人に口なしで、跡の氣掛りも残らぬからといふので、周章て急に片付

一 藩翰 地方を鎮め、王室の守りとなる國家の重臣、轉じて諸侯。

二 押込 江戸時代の刑罰の一。一定期間、部屋に閉込めて外出を禁止するもの。

けてしまつたのでもあらう。或は綱宗の亂行を募らしたのも、實は兵部少輔の側の策であつたから、其尻が割れるのを恐れて急に片付けて仕まつたのだと云ふ説もある。斯様の次第で龜千代は二歳で大國の主になり、兵部少輔と龜千代の叔父にあたる田村右京亮宗良の二人が後見と云ふことになつた。田村右京亮宗良は綱宗朝臣の庶兄で、始め家中の門閥家鈴木修理といふもの、家督を継ぎ、一萬石を領して居つたが、叔母の天麟院尼（即ち松平上總介忠輝の室であつたる婦人にて正宗卿の女なり）に可愛がられたものと見えて、山口内記といふもの、女にお糸といふ美女があつたのを天麟院尼の養女にして、右京亮に娶らせた。其後正宗の室養徳院の願に因り、何うぞ右京に跡取らしてくれるやうと、死去の時に遺言があつたので、更に田村の家を相續したのである。養徳院と云ふのは、田村大膳大夫清顯といふ人の娘であつて、正宗卿の正室になつたのである。田村といふのは征夷將軍田村麻呂以來の名家であつたのに、此時家が絶えてしまつたので、養徳院はそれを歎き、それで右京亮に田村の家名を継げたのである。されば此時まで、右京亮は奥州栗田郡岩ヶ崎といふ所に住んで居たが、陸奥守隠居の内相談があつたとき、將軍家から召された。しかし此時はまだ江戸に來ない。九月になつて江戸に着き、十二月二十五日、始めて將軍家に謁見し、仙臺領の内三萬石、名取郡岩沼に於て配分すべき旨申渡され、同二十八日、敘爵して、從五位下右京亮になつた。斯様に表面は兵部少輔と右京亮と兩人で後見をする様になつては居たが、此右京亮（後、隱岐守と改む）は天性まことに多病であるのみならず、其上兵部少輔とは叔姪の間柄でもあり、それに兵部の方は是までに永く江戸に往來して、柳營諸役人をはじめ諸大名の間の挨拶ぶりなども、何ういふ様子かといふことを吞込んで居たから、萬事の遣口はとても右京亮の及ぶ所でない。そのみならず、全體二人して一家の政事を遣つてゆくこと

三 庶兄 妾腹の兄。庶子の兄。

四 叔姪 叔父と姪または甥。

は、誰にしても随分六ヶかしいことであるから、右京亮も勿論多病を押休へて勤める積りでは居たが、右のやうな譯でいつしか何事も大抵兵部少輔に權を取られるやうになつた。俗本に、此時始めは柳營から兵部少輔一人に番代を申付けようかと云ふ内命があつたのを、老臣たちは、當家には番代と云ふ例は御座らぬと答へた。そこで然らば兵部少輔に後見職を仰せ付けようかと云ふ内命があつた。老臣等再び相談を遂げ、田村右京亮を加へて二人の後見と云ふことに願ひ、其通りになつたと書いてある。確な本には其事がないやうなれども、これは事實かも知れない。しかし、後見を仰付けらるゝときは、専ら一人に申付けると云ふことは柳營の例にないやうであるから、多分例の下馬沙汰であらう。兵部は後見を言付かつた時、奥州一關で三萬石の大名になつた。

伊達家の事については猶ほ此外に一人の口を利く大名があつた。それは則ち綱宗の姉の片付いた柳川の城主立花左近將監忠茂であつて、兩後見は伊達家のことについては萬事此人にも相談した。つまり伊達の政治には三人の首領があつたのだから六ヶかしい。加之家老は又家老の意見もあるから、なか／＼兵部一人の思ふやう自由になるものでもない。

此處に綱宗の隱居になつた次第を考へて見ると、此事が伊達家の黨派の争ひに大層關係があると思はれる。元來、綱宗は萬治元年九月に家督を繼がれて、翌年は其儘過ぎて三年七月に閉門となつたのであるから、其間はほんの僅の月日である。綱宗が何んぼ不品行であつたにした所が、あんなことにまで立至らないで、何うにかこれを救ふ道は必ずない譯がないと思はれる。然るに一門家老が澤山頭を並べて居るにも拘らず、悉く手を懷にして見て居て、さていよ／＼傍からとて此儘に打遣りて置けまいと騒がれるに至つて、詮方なく隱居を願出るなど、云ふことは、餘

りに馬鹿々々しい仕打で、伊達家にとつては眞に恥しい失態といはねばならぬ。斯ういふことになつたのは、勿論、綱宗のわろかつた爲であるは云ふまでもないが、しかしながら一は又久しく以前から伊達家にあつた黨派の争ひに因る譯であらう。忠宗の時代に大に羽振りのよかつた古内主膳は浪人から取立てられた人で、縁故を辿つた黨派の關係といふものが少しも無かつたから、伊達家の黨派の争ひについては云はゞ第三者のやうな位置に立て居た。それゆゑ此人の威權の盛んな間は、伊達家の中に大した苦情もなくて済んだらしい。そこで古内主膳が死くなつて、奥山大學と茂庭周防などが大に頭を擡げるやうになつて、黨派の熱がだん／＼強くなつて來た。是は其時の勢力家の一門親戚がそれからそれへと系統を引いて、黨派の蔓が延びて、互に權力を争つたからである。たとへば一方には茂庭周防の親類續であつた、富塚、原田などいふものがあり、一方には奥山大學の類であつた柴田、大條などいふものがある。そして其他の役人、家中いづれも、此兩派の敵味方となつて互に睨み合つて居たのである。それゆゑ平生雙方とも唯だ自分の黨派の勢力を落さぬやう、之を強くすることにばかり心をとられて、大事の殿の行儀のことなどは餘り注意を拂ふ餘裕がない程であつたらしい。彼等にして若し殿様に對して考へることがあつたとすれば、それは唯だ殿様の御覺えめでたいやう其御氣に入られやうと思つたのみで、殿の行儀に就ては、たとへ其心にさからつても之を救はうといふ忠義の心が活動して居なかつたから、遂に此様な始末に立至らしたのである。其故觀察の仕様に依れば、黨派の争ひといふものが伊達家を禍したのである。そして是から後の伊達家を禍したのもやはり黨派の争ひであつたのである。